

講演Ⅱ

「ボランテティア・ネットワーク」 阪神大震災の経験を通して」

A M D A (アジア医師連絡協議会) 事務局次長

津 曲 兼 司 先生



講師プロフィール

津曲 兼司 (つまがり けんじ)

A M D A (アジア医師連絡協議会) 事務局次長

アスカ会菅波内科医院副院長

一九五六年十二月十五日 千葉県松戸市生まれ 三十八才

(学歴)

一九七九年四月

東京外国語大学中退後、アフリカ言語研究を目的にケニヤに留学。約二年間
アフリカ滞在。

一九八三年四月

アフリカでの医療活動をめざし秋田大学医学部入学。
入学当初よりA M S A (アジア医学生連絡協議会)の一員とし、毎年アジア
各国を訪問して現地の医学生との交流を続ける。

(職歴)

一九八九年三月

医学部卒業とともにA M D A 入会。

同

秋田大学医学部第二外科入局。

一九九二年一月より現職。

一九九二年四月

バングラデシュ内ミャンマー難民救援医療プロジェクトにてソマリア、ジブチ、ケニヤで医療活動。

一九九三年一月～二月、三月～四月

ソマリア難民救援プロジェクトにてソマリア、ジブチ、ケニヤで医療活動。

一九九三年七月十七日より三度目のソマリア訪問。

一九九四年二月

モザンビークプロジェクト開始準備の為訪問。

一九九四年八月

ルワンダ難民政府調査団としてルワンダ国内、ザイルのゴマ地区を視察。

一九九四年一月十七日

阪神大震災当日より神戸市長田区にて緊急医療プロジェクト展開。

皆様、こんにちは。私、このような席で私のような者がお話しさせていただくのが非常に不つり合
いのような感じがするんですけども、このようなお席でお話しさせていただくことを非常に光栄に
思っております。

我々の組織といたしますと、AMD Aというふうに言います。AMD Aという組織を御存じの方は手
を挙げていただきたいんですけども、余り……、半分以下だということなんですけれども、最近非
常に新聞、テレビなどで我々の活動が紹介されておりますんで、目になされた方が多いと思うん
ですけども、AMD Aというのはどういう団体かと、一言で申し上げますと、「あ、むだ」というふ
なことで、むだなことばかりやっている団体です。実際問題、社会生活をなされてまして、いろ
んな富を生み出す、そういうふうなことではございません。我々AMD AというのはNGO、つまりN
ON・GOVERNMENTAL・ORGANIZATION、つまり非政府組織と訳すんですけども、民間のボラン
ティア団体、海外にいる人などで難民が出たり、地震があったり洪水が起こっ
たり、そういうところに医者、看護婦を中心にしてすぐに出ていきまして、そこで救済活動をする。
そういうふうな組織でございます。

我々のAMD Aという団体、非常にユニークだというふうに言われています。この前のサハリンの
地震のときには、次の日に岡山から飛行機を飛ばしましてサハリンまでビザなしで入りまして救済活
動をしました。この前、インドネシアの地震のときも、もう次の日に出ていきました。私自身、阪神
大震災の当日、一月十七日に神戸の長田に入りまして、医療救援活動をしてきました。国内に限らず、
その前も八〇〇万人の人口のうち一〇〇万人が殺され、二〇〇万人が難民となったルワンダという国

がございませうけれども、そこに我々は診療所を設けまして、もう何万人もの方を診療してきました。そういう世界的な団体でございませう。

しかしながら、我々がユニークだというふうに言われるゆえんというのは、こういった民間の国際ボランティア団体というのは、日本にこれまで余りなかったんですね。欧米、ヨーロッパとかアメリカとかにはたくさんございませう。植民地主義、そしてキリスト教の伝道がかなり世界じゅうに行き渡り、それに伴って、日本人を見たりアフリカ人を見たり、アジア人を見たりしますと、食べ物は非常に粗末なものを食べている、着るものも履くものも。そういうところにやはり自分たちのすぐれた文化、そして宗教を分け与えることによって世界全体がよくなるんじゃないか、そういうふうなことで、もう何世紀も前からああいいう国々では国際的なボランティア団体がございませう。

しかしながら、我々AMDAというものは、アジアの団体でございませう。アジアの十五の国にAMDAの支部がございませう。その支部が自分の国で起こった大災害とか難民とか、そういうところには早く行って、ほかのAMDA支部の支援を仰いでプロジェクトをやると。そういった団体というのは、今までなかったんです。つまり、今までのボランティア活動、国際的ボランティア活動というのは非常に文化の進んだ国から文化のおくれた国へ、そして金持ちの国から貧しい国へ、一方通行の援助が多かったのです。しかしながら、我々はアジアの地域、これは我々の住んでいる世界なんだ。それを自分たちアジア人の手で守ろう。ですから、我々の仲間にはAMDAネパールもございませう。AMDAバングラデシュもございませう。もう世界の最貧国民健康保険と言われる国々でも我々の支部がございませう、そういう国々でもやはり自分の国でのいろいろ困っていらっしやる方々、ボランティア

ア活動をなさっているいろんな団体がございませう。ですから、自分たちの住むアジアを自分たちアジア人の手で横へのベクトル、そういった視点でやっている、こういう国際的なNGOというのは世界にございませう。そういう意味でユニークだと言われています。

もう一つは、我々の本部というのは、この岡山にございませう。ここから車で十五分も走ったところに、この世界で二十ものプロジェクトを行って、支部が現在アフリカとか南米を含めると二十にもならんとしてございませうけれども、それだけの国際団体の中心が岡山にある。

我々は、このゆえんというのは、我々の団体の一番初めからお話ししなくちゃいけないですけれども、我々の代表というのは普波茂という、今開業をしている男なんですけれども、この近くで一番初めに、一九七九年なんですけれども、カンボジアという国からタイにたくさん難民が流れていっせう。そのとき、タイにたくさん難民キャンプがございませうけれども、一人の医者と二人の医学生、これは岡山大学の医学生なんですけれども、我々の力で何かお手伝いはできないかということでタイに入りました。タイに入ったんですけれども、どうやって行っているのかかわらない。そして、熱帯病の知識もない。タイの文化の知識もない。だれと一緒にやっているのかかわらない。何もできなかった。逆に本当にお荷物だったんです。我々、そのとき、本当でない頭で、そしたら我々のこの何かしたいという思いというのを実現させるため、何をしたらいいだろうか。我々は考えました。たくさんのお医者さんを集めて、すぐに活動する、そういうことも考えました。一九七九年ですから、今から十六、七年前です。しかしながら、我々の発想は違ったんです。先ほど言いましたように、我々アジアのたくさんの方に行きまして、そういう貧しい国でも社会的な正義、そしてボランティアのため

に活動している方々がたくさんいるというのは見てまいりました。そういう方々と仲間の輪、タモリ流で言えば友達の輪をつくりまして、電話一本、ファックス一本でいろんな災害で動けるようにしよう。そのためには、今医学生がいろんな国にいます。そういう医学生との友好を深めようということで、その一九七九年にAMSA、先ほど御紹介にあずかりましたようにアソシエーション・オブ・メデイカルシチューデント・フォア・アジア、アジア医学生連絡協議会というものを、そういうものをつくりました。毎年のように交流をしましたり、その国の子供の健康を考える国際会議を開きまして、友達の輪をどんどんどんどんつくっていったんです。

そして、五年後の一九八四年、その医学生がどんどん医者になりました。経験を積んでいく。そのときに、やはり世界ではいろんな飢餓が起こったり、災害が起こったり、もうみんなの間で我々の技術、熱意、何とか生かせないものか。そこで、一九八四年、医者の中でアジア医師連絡協議会、アソシエーション・オブ・メデイカルドクターズ・フォア・アジア、アジア医師連絡協議会というものを結成されたのです。

しかしながら、我々の団体というのは民間の団体でございます。何かしようと思っても先立つものがございません、お金ですね。ですから、我々八四年に設立、今で十二年になりますけれども、何にもやっぱりできなかったんです。ずうっとやはりアジアの医師の間でネットワークをつくり上げた。本当にこのとき、ネットワークというものが大事だろう、将来大事になってくるだろう、そういうふうに思っつけてくり上げていったんです。そして、皆さんも入っている方がいらっしやると思うんですけども、郵政省のボランティア貯金というのがございます。あれが一九九一年にできまして、その

ときに初めてネパールに、無医村にAMDAクリニックというものを開きました。そこで活動した。こういったものも日本人、金持ちの日本人があちちに行つてやるんではない。ネパールのお医者さん、AMDAネパールのお医者さんが現地につくって、我々が足りないもの、いろんな医療器具、人材、そしてお金、そういったものを助けることによってすべてのプロジェクトをやっていく。一番初めのプロジェクトは一九九一年でございました。

ことし我々は非常に受賞続きの年だったんです。といえますのは、ことし我々は国連がございまして、国連の認定のNGOというものになりました。国連と一緒に仕事をやっていこう、意見を聞こうじゃないか、そういうNGO、世界でたくさんございすけれども、日本には非常に少ない。それも三ラックあるんです。一番下というのは、ただ会議に参加するだけ、最初入るにはそこからなんですけれども、我々は今までいろんな活動を世界じゅうで繰り広げていますんで、二番目の段階に突然ほんと認定されてしまった。我々は国連の社会経済委員会というところに出席しまして、我々がいろんな世界の難民、被災民現場で見たところ、国連がここが足りない、こういうことをやったらいいんじゃないか、そういうものを国連に提案できる、そういうふうなNGOに選ばれました。そして、ブルスト・ガリという方がおられます。国連の事務総長なんですけれども、そのブルスト・ガリ賞、第二回のブルスト・ガリ賞、国際的な、それを我々がことし受けました。第一回の受賞者があのUNHCR、国連の難民高等弁務官事務所というところの日本の緒方貞子さんという方がいらっしやる。この前、九月に私、ジュネーブ、国連の中心ですけれども、行ってきまして、ものすごく高い評価を受けておられる日本の女性なんですけれども、トップなんです。その方が第一回の受賞、第二回の受賞が我々

でした。そして、ことし読売の国際協力賞、毎日の国際協力賞、そして岡山でも賞をいただきました。本当に世界のNGOとして認められた、そういうふうな組織でございます。

実際問題、皆さん、ちょっと手元にパンフレットがございますか。配られているでしょうか、地図を書いた、それです。これなんですけれども、AMDAとはどういうことか、どういうものか、どういふふうに活動しているかというパンフレットなんですけれども、中の方、地図が書いてある方がございます。左の上の地図をごらんください。パキスタンとかインド、ネパール、バングラデシュ、タイ、スリランカ、シンガポール、マレーシア、カンボジア、フィリピン、こういった文字で書かれているところに我々の支部がございます。実際問題、こういったところにある我々のAMDAの支部とネットワークをとることによって、アジアでいろんなプロジェクトを行ってきました。例えば、二番目に書いてありますネパール王国ビスネ村保健医療プロジェクト、これがございます。あと八番目に、ネパール国内ブータン難民医療プロジェクト、バングラデシュ、ミャンマー難民医療プロジェクト、こういうものをずっとやってきましたら、国連とかアフリカ、中米のいろんな国から本当にAMDAの活動はいい、うちでもやってくれないかということ、アフリカの方で、そしてボスニアヘルツゴビナ、南米の方で活動をするようになりました。それが六番にありますエチオピアでのプロジェクトとか十一番のソマリア難民救援プロジェクト、そして十四番のモザンビーク機関難民プロジェクトとか、あとルワンダ難民救援プロジェクト、十七番、あとサハリンでもやりましたしインドネシアでもやりましたし、いろんなところでやっています。こういったところには、我々日本人だけではなくて多国籍医師団という形、つまりバングラデシュ、ネパール、日本、いろんなと

ころのお医者さんが現地に行きまして難民、被災民のために医療活動をする。そういったNGOというのは今までございませんでした。

これだけのたぐさんの、世界じゅうでプロジェクトをやっている、その本部が岡山にございます。なぜ岡山かという、一番初めがやはり岡山の学生と岡山大学の医師が始めた運動というものもございませぬけれども、大きなNGOが大体、東京、大阪、そういうところに事務局を置いているんですね。しかしながら、我々は岡山に本部を置き、そして岡山からの指令で全世界でプロジェクトを行っている。そして、将来もこの本部を変えるつもりはない、そういったNGOなんです。日本では、こういう団体というのは本当に少のうございます。

といいますのは、東京、大阪に本部がございますと、人が非常に集めやすい、情報が集めやすい、お金が集めやすい、いいことだらけなんですけれども、一つ欠けているところである。それは何かと言うと、特定の人々の団体になってしまう。住民の支持が得られない。我々の場合には、大きな目標がございます。今、日本というのは国連の中で常任理事国になろうとしていますけれども、やはり日本というのは非常に特殊な国だと思うんです。今、国連の常任理事国というのはアメリカ、ソ連、中国、フランス、イギリスとございますけれども、世界の災害現場、そして難民が出ているところ、どこへ行ってもすべて武器はその国連の中心の国、そういうところがつくった武器で戦争が行われております。日本というのは戦後五十年ですね、本当に平和憲法のもとに、話し合いのもとに世界平和を実現するという方向を探ってきたと思います。そういったふうに武器を使わない、武器輸出をしない、武器をつくらぬ、話し合いによって世界平和を実現しようじゃないか、そういった可能性を秘めた

国じゃないか。その一つの集団というのが我々NGO、民間の国際ボランティア団体ではないかというふうに思います。我々は、このAMDAの活動というのを一部の医者や看護婦や一般の方々の、そういった活動にしたいくないんです。まず、我々は岡山全体を巻き込んで、岡山の県民運動としたい。つまり、岡山の人々がこういった平和的手段によって世界平和に貢献できるような、そういうふうな組織にまざりたいというふうに思っております。

実際、岡山市、倉敷市、加茂川町、いろんなところに我々支援の団体ができまして、加茂川町、今帰ってきたんですけれども、そこでは二年前に私と一緒にソマリヤに二人の町の役人さんが行ってくださいまして、いろいろな活動をしてくださった。地方自治体もやってくださいまして。そういったふうに岡山全体にこの運動を広げて、医師、特定の人たちではない、岡山の県民運動としてやろうじゃないか。そして、この運動を岡山から日本全体に広げて、武器によらない、武力によらない世界平和の達成、それを世界に発現できるような、そういった国にしていこうじゃないか。そういう夢がござります。

そのためには、我々はこの岡山というのをジュネーブというところ、スイスのジュネーブですけれども、そこが国連の中心なんですけれども、西のジュネーブ、東の岡山、民間の人道支援、国際貢献の中心、情報を中心、人の中心、それを持ってこようじゃないか。広島が国際平和都市で非常に有名ならば、岡山を国際貢献都市と位置づけまして、国際貢献の世界的な中心は岡山なんだというふうな形にしよう。それを日本全体に広げていこうじゃないか。そういうふうに思っておるわけなんです。

そして現在、我々が進めている非常に大きな計画というのは、日本人というのはやはり外国に出て、

いろんな援助活動をするに際して、方法論とか知識が欠けているんです。現場に行って医者とか看護婦というのは偉そうな顔をしていても一番下なんです。兵隊なんです。一番上がコーディネーター、調整員と呼ばれる普通の方々、現地の政府、国連いろんなNGO、そういうところと交渉して、水、食べ物、車、住居、そういうものを全部そろえて、そういう方々が一番偉いんです。そういう方々が日本には余りいないんです。そういう意味で、我々は世界で初めての国際貢献大学、NGO大学、AMDA大学と言いますけども、それを岡山に建設します。かなり話は進んでおります。そういった人材を日本で育てて、地方自治体に送ったり、国の活動に送ったり、我々みたいな民間の活動に送ったり、すそ野を広げるといって、そういった役割を果たしていこうじゃないか、そういうふうに我々は思っております。

私、九月に国連、ジュネーブの方に、スイスの方に行つてまいりまして、そしてその前もソマリヤとかルワンダとか戦火が激しいところに行つてきて、阪神大震災にも行って参りました。そのときに、やはり一番感じたのは、我々みたいな民間の団体であろうと、政府であろうと、宗教者の方々であろうと、今体験していることというのは世界で初めてのことなんだといつも思うんです。みずから変わらうとしないものというのは、だんだんだんだん時代に埋もれていく、そういうふうに思っているわけなんです。

といいますのは、本当に現在、私は老人保健施設というところで御老人の健康管理とか、そういうことを今やっておるんですけれども、実際問題、老人にしろ、今大体もう日本の人口の十四、五%が六十五歳以上の方でいらっしやいます。これが二〇二五年には四人に一人、二十五%になろうとして

います。これだけの高齢者が多い社会というのは、我々人類というのはこれまでに経験したことのない世界なんです。そして、これだけ物があふれ、情報があふれる時代というのも、我々日本人だけじゃなくて世界の人々が経験したことのない時代なんです。実際問題、災害とか難民の現場へ出てみます。そうしますと、本当にもう難民であろうと、世界のいろんな情報が彼らの耳に入っている。そして、いろんな宗教の教義とか、そういったものも耳に入っている。昔みたいに、日本だけでいろんな宗教、文化を説いていた時代は終わっただけです。宇宙船地球号と言われるように、情報とか人がどんどんどんどん行き交うようになってきて、いろんな情報が入ってきますと、いろんなものが個人が選べるという時代になった。しかしながら、すべての全世界の国民が一様化するかというと、そうではないというふうに私は世界を見て思うんです。

例えば、ボスニアヘルツゴビナは宗教的素因というのが非常に強いと思う。イスラム教とかキリスト教とか、いろんなものが宗教的に争っている。そして、国連の加盟国というのはどんどんどんどんふえ続けています。国が一つになっていこうとする気配はほとんど見られないんです。

AMDAというのは、いろんな国のドクター、そして支部からなっております、いろんな国で活動しています。そのときに、我々が一番尊重しなくてはいけないのは、多様性の尊重というものです。実際問題、地球がすべて均一化するのではなくて、それぞれの国の方々がそれぞれの文化、宗教というものを非常に大切にしている時代になってきた。そのためには、人が行ったり情報が行き交ったりすると、自分は自分である、こういう存在、文化、宗教、そして土壌に育った人間であるという、そういった認識のもとに世界じゅう多々ある宗教、文化というものを尊重し合わないと、生存できない世界

になってきたというふうに思われるんです。

ですから、欧米のそういうボランティア団体の活動が非常に文化の押しつけだという批判がこれまでございましたけれども、我々の場合には、例えばソマリアに我々が行きます。ソマリア人のためにいろんな医療救援プロジェクトをする。そのときに、我々は必ずバングラデシュのお医者さんをこのソマリアに入れるんです。我々とかインドの人とか、あとフィリピンの人とか行きます。キリスト教、仏教、行きますけれども、やはりイスラム教の国々であるプロジェクトというのはバングラデシュ、イスラム教の国です。その国の人がいた方がずっと効率的で、相手を尊重してプロジェクトができる。そういうときには、バングラデシュの方々にもいろいろな宗教的な対立とか、そういったものをお聞きしながら、それを尊重しながら我々はプロジェクトができるんです。ですから、我々は多様性の尊重というものを非常に大切にしております。

欧米が昔から個人主義ということがございまして、個々の人権を尊重するということがございまして、けれども、我々というのは相互理解、そして相互扶助の精神、こういったものをもうすぐく尊重してやっております。

実際問題、きょう我々のこういったボランティア活動と皆さんがなさっていらつしやるボランティア活動、接点はということなんですけれども、我々はNGOでございます。どういう政党にもどういふ宗教にも偏らない、そういうふうな活動を繰り広げているわけなんですけれども、我々の方針として、すべてとの関係を絶つということはいたしません。すべての宗教、そして政党、文化、そういったものと等しくおつき合いをして、そこで自分たちの立場をつくり上げていく。そういったこと

をしております。

例えば、ルワンダというアフリカの中心部で、先ほど言いましたようなプロジェクトでは、カソリック教会と一緒にプロジェクトをつくりましてやりました。今、ヨーロッパのボスニアヘルツゴビナにおける運動では、立正佼成会さんと、あとカンボジアに学校をつくる会、そういったところとタグを組みまして、一緒になってチームを組みましてプロジェクトをやっております。

南アフリカ共和国がございます、あそこはこの前、マンデラ大統領、黒人の大統領が立ちまして、人種差別というものが表面上なくなっただけですけれども、やはり貧しい層というのは、やっぱり黒人なんです。そういう黒人の生活基盤、医療、そういったものを支援しようじゃないか。南アで我々が組んだのは、連合と部落解放同盟、これと一緒に事務所を置きましていろんな活動をする。

我々は、AMDA自体は非常に大きくしようとは思っておりません。といいますのは、今欧米にたくさん大きなNGOがあるんですけども、たくさんの人を雇って、大きなビル建てて、そしてやっておりますけれども、すごくそれにお金がかかるんですよ。そのためには、いろんな難民とか被災民がいなければ自分たちが生きていけないという構造がございます。国連なんて一番大きなものですね、これなんか。そういった意味で、我々自身は小さいんだけど、世界じゅうのいろんなNGOがございます。そういう欧米の大きなNGOじゃなくても、例えばバングラデシュ内だったら何百ものそういうNGO、ボランティア団体がございます。そういうところと連絡を取り合う。ネットワークをつくる。国内でも、先ほど言いましたように部落解放同盟とか連合とか、自民党とか社会党とか、いろんなところとっておりますけれども、立正佼成会ともっておりますし、カソリックともと

ておりますし、いろんなところ一緒にになってやる。そういうことによって、非常にコストパフォーマンスという効率がいい活動ができるんです。例えば、バングラデシュとかネパールで何か起こったら、日本人がぼんぼんぼんぼん行ってやる必要はないんです。一番いいのはその国で、自分たちでやるというのがいいわけです。それに足りないところを我々が補ってあげる。それが一番いい活動じゃないかというふうに我々は思っております。

そういった意味で、国際的なネットワーク、国内的なネットワークというものを現在我々はつくっている。この大会が開かれている今週なんですけれども、我々は岡山の国際ホテルで、世界的なNGOの会議、第二回目の会議を開いております。世界の二十カ国からNGOの代表者を集めまして、今後の協力関係というものをつくっていかうじゃないか。そういった会議をしております。

あと、その前、九月に会議が行われたんですけども、エープロは今大阪でやっていますけれども、エープロというのはAPPECですね、あつちは。アジアのいろんなNGOが集まりまして、自然災害、地震とか洪水がアジアで起こった場合に、互いに力を合わせることにによってすぐ行って、効果的な活動しようじゃないか、そういったグループもこの前つくっております。そういった意味で、本当に個々の力は弱くとも、大きく世界的にまとまることによって大きな力を発揮できる。より少ない人材、より少ないお金で非常に大きな仕事が国際的にできる。そういうふうに我々は思っています。

そういった意味で、我々はネットワークというものをどんどんどんどんつくろうというふうに思っています。今度も天台仏教青年連盟の方々に提案したいのは、どういう形でもいいから我々と一回一緒にプロジェクトをやっていたら。人を送るのが一番いいと思うんです。どういう人でもよろ

しい。現場を見ていただく、それが一番のレッスンじゃないかというふうに思う。一番初めに興味を持っていただいて、そして自分の目と足と耳でいろんな方々の、被災された方々、難民の方々の声を聞いていただく。それがやはり相互理解、そしてひいては相互扶助につながるんじゃないか、そういうふうに思っております。

我々、きょうスライドをたくさん持ってまいりました。私、AMDAの別名「必殺プロジェクト打ち上げ人」という名称がございまして、「あした、アフリカに飛べ」と言ったら、もうすぐに私、飛行機に乗って行っております。だから、今ここにおりますけども、あしたはアフリカにいるかもしれない。現場にぼんと飛びまして、国連とか、難民が出た国、いろんなNGOとぼんぼんぼん話し合います。いろんな契約をする。車を調達する、そして家を調達する、食べ物も調達する、水を調達する。それを全部やりまして、後から来るお医者さん、看護婦さん、いろんな一般の調整者の方々、そういうものを呼ぶという仕事を非常に得意にしております。私は、先ほどおっしゃいましたように、二十一のときに二年間アフリカに留学しておりましたので、アフリカ語もできるんです。英語とか、いろんな言葉でできますんで、そういう仕事で非常に得意なんです。そういう意味で、私は先ほど申しましたように阪神大震災の当日、一月十七日に神戸の長田に入りました。そして、先ほど言いましたようにルワンダ、一〇〇万人の人が殺され、二〇〇万人の人が海外に逃げた、そういう国で診療所をつくった。その一番初めの仕事もしております。そして、その前の年、現在でも政府がない、無政府状態だと言われる国連が、そしてアメリカが入っても何も解決しなかったというソマリア、あそこで我々、現在でも難民に対するプロジェクトを続けておる。そこにも三回ほど行きまして

プロジェクトの立ち上がりとか、いろんなことにかかわってきました。

スライドを見ながら我々の活動を御説明申し上げたいと思うんですけども、第一に阪神大震災のときなんですけれども、我々の原則というのは迅速というのがあるんです。我々は医者ですから、ああいう災害が起こったときというのは、一番何が必要かという迅速さなんです。七十二時間ネットワークというのを我々はつくっているんです。七十二時間以内に、いかにけがなさった方、病気の方の応急処置を終えるか。それによって死者とか重傷の人の数、それがどんと減るのが国際的にわかっている。そのためには、一分一秒でも早く現場に入らなくちゃいけないんです。世界各国で我々というのはそういうことをやってきました。

そういうことで、当日、皆さんいろんなところから来られていると思いますけれども、中四国というのは大体震度四ぐらいでしたね。ですから、私の友達で、朝もう地震のときには、全く気づかないで、朝のテレビで見て地震を知ったという方も岡山にいらっしやいましたけれども、実際私も震度四ぐらいだったら、私は関東ですんで、「ああ、こんなもんようある地震だ」というふうなことで、普通の診療をしておったんですけれども、午前中にどんどんテレビ、そしてラジオ、新聞でひどい状態になっているということが伝わってきました。そのときに、AMDAの本部にはアジア各国から、そして日本各地からこのときこそもう世界各国で培った我々のノウハウとか人材というものを日本のために役立てる、そういう時だ、もうすぐにAMDAの医者を派遣しよう、そういうふうな声が上がりました、私が先ほど言ったように必殺プロジェクト打ち上げ人という名称がございまして、私のところに話が来まして、一時ごろ来たんですけれども、そのとき私は入院患者さんを診てい

たんですけれども、「ああ、じゃあ行きます」ということで、残りの患者さんをさっと診まして、決して手を抜いたわけじゃなくて、ポイントを突いた診療をして、そして下におりてきまして、そのとき何をやったかというところ、車を一台用意しまして、その中に病院じゅうの薬をほうり込んだ。寝袋をほうり込んだ。水をほうり込んだ。食べ物もほうり込んだ。なぜかというところ、世界各地、どこでやるにしても、原則として自給自足ということがございます。自己完結性とも言えますけれども、自分たちが活動をやる、そういう物資というのは絶対現地のものを使っちゃいかんのです。自分たちで全部持つていかなくちゃいけない。ですから、我々は現地で本当に寝るところがなかったら、もう寒かったんですけれども、道の上でも寝袋で寝ようというふうに思って、寝袋を積んでいきました。そして、ぼーんと出ていったんです。一時間もかからなかった。私自身のものとしてはもう白衣とジャンパーぐらいしかなかった。ぼーんと出ていきましたけれども、途中の病院とか、いろんなところに頼んでおきまして医師、看護婦を出していただいたり、最終的には医師三名、看護婦二名、そして薬剤師一人の六人のチーム、それで飛び出していったんです。岡山から神戸って二号線があるんじゃないかというんですけれども、二号線というのはものすごくあの日込んでいました。込んでいたんで、あれは使えない。我々は思いまして、海岸沿いの赤穂の方の道がございませぬ、あちからずうと行つたんです。割合にあちらの方はすいておりまして、すうと行けたんですけれども、明石あたりで二号線にぼんと乗つたら、これが全く車が動かないんです。もうびたりととまったまま動かないんですよ。我々はあせっています。一分一秒でも現場にすぐ駆けつけて、自分の目で現場を見て、いろんな方々の声を聞いて、何が必要か、それを自分たちで取材して、後方支援部隊に伝えて、どんどんどんどん

持ってくる。一分一秒でも早く入らなくちゃいけない。そういうふうに思っていましたから、本当にあせっていたんです。

もうその前は、もう一つ原則がございまして、ともかく我々は当日行くこと決めました。行くこと決めて、兵庫県そして神戸市、そしていろんな区役所に電話をかけたなり、病院にかけたりしました。でも一本もつながらないんです、皆さんもおわかりのように。NTTが制限してましたからね、あのときに。もうものすごい数でしたんで。我々は電話をいろんなところへかけたんですけれども、つながらない。それであきらめてしまったいろんな団体とか個人が非常にあの日は多かったです。

しかしながら、我々の考えは違います。海外でやっていますから、そういう難民が出た、災害が起きた現場というのはものすごく混乱している。通信、電話とか、いろんな通信がつかないのは当たり前のことなんだというふうな考えをするんです。そういうふうな連絡がつかなかった場合には、我々はおもうすぐに出発するという原則でいっております。どういう現場でも出発して、そこに救援の可能性がなければ、「ああ、よかった」、そういうふう喜んで帰る。救援の可能性があれば、どんどん後方支援部隊に言って必要な人材、物、医薬品、そういうものを送っていただく。そういう我々はシステムをつくり上げていますんで、あのときにはともかく二号線に乗りまして、もう全然動かないで一分一秒でも早く入りたい。いらいらいらしていたんです。もうそういうものの上には神風が吹くんですね。後ろからずうと神風が吹いてきたんです。後ろからパトカーが一台来まして、緊急自動車十九台通りますと、後ろに消防車が十九台ずらっと並んでいるんです。みんなずうと道をあけたんです。我々、「これだ」というふうに叫びまして、六人全員、その場で白衣にばっ

と着がえまして、十六、十七、十八、十九、これが最後だ、四輪駆動車の後ろのライトを両方つけまして、その裏にびたつとついて、中まで入っていつてしまった。

だんだんだんだん神戸に近づくに従って、倒れた建物、火事、そういったものが見えてきます。ずうつと入っていますと、ちょうどやはり倒れた高速道路がありますけれども、倒れてなかったんですけれども、やっぱりその柱の一部、コンクリートが落ちまして鉄骨が曲がっているんですね。余震でも来たら、これはもう一巻の終わりだなと思いましたが、ざつと行く。私、神戸というのは地理をあんまり詳しくなかったもんですから、神戸に入ったと思っただけでも、どこに入ったかわからなかった。ちょうど神戸に入ったのが夜の九時半ごろだった。夜の九時半ですから、あたりは真っ暗なはずなんですけれども、本当に不気味なほど明るかった。後でわかったんですけれども、我々の入ったところがあの体育館の長田に入ったんですね。もう本当に薄気味悪いぐらいに明るかったです。

そして、ずうつと消防車の後をついていきまして、我々が考えたことは、電話は通じない。そのときに海外ではどうするか。無線だ。無線を持ってるのはだれか。警官だ。警官を見つけよう。その消防車の後ろからさつと離れまして、すぐ一方通行のところに入った。見つけました。交通整理している白バイの警官。非常に若いやせた警官だったんですけれども、見つけまして、医師三人おりました、医者三人とも非常に体の大きな私みたいながつしりした、別名でぶとも言いますけれども、そういう医者だったんで、その警官を周り三人が囲みまして、我々、神戸西市民病院御存じですね、四階部分が壊れた病院、あそこから連絡を受けた。すぐ来てくれ、すぐ手伝ってくれ、もうそういうふう

に言われたんで来たんだ。しかしながら、神戸西市民病院は壊れていて全然患者もいないし医者もいないんだ。我々の活動するところをすぐ探してくれて警官に言ったんです。ずうつと言ったんで、脅したわけじゃないですけども、非常に丁寧に言ったんですけれども、警官の方も小さくなりました。「わかりました」ということで、無線を使いましていろいろなところに連絡してくれたんですけれども、やはり無線もものすごく込んでいますね。時間がかかった。私も、外に出るときに、一番初めに感じたのは、ものすごく周りがきな臭いにおい。空には火事からの黒煙がずうつと。それを火事の炎がもう不気味に照らし出している。避難者の方々もあの夜のことですから、もう走り回っているような状態。本当に地獄のような光景だったんですね。そのときに、警官が「見つかりました」と、

「長田の区役所の四階に保健所がある。そこに行ってください」、そういうふうに言われた。そこから我々、大名旅行でして、白バイの先導で二台の四輪駆動車がざつと行ったんですけれども、やはり道はもうでこぼこになっている、瓦れきの山はある。家は斜めになって、もう道にかぶさろうとしている。そういうところをずうつと行ったんです。余震が来れば怖いなと思っただけでも、十時ごろその保健所の前に着いた。区役所と一緒にですから、大きなビル。その四階に我々は行ったんですけれども、四、五人の保健婦さんしかいないんです。いつも七、八十人いるんです、区の中心ですからね。それはもう、皆さん被災された方で、被災が少なく、家が近くて歩いてこれる方だけが来ていた。そのとき、保健婦さんというのはぼつと何をしてしようかということ、何もなさってなかったんですね。通常、救援活動なんかをやるのが保健婦の仕事ではない。そして、電気も来てない。電話をかけようと思っても電話もかけられないという状態。我々、さつと保健所に行きまして、「す

ぐに避難所回りをしましょう」「そういうふうに提案した。「すぐに地図を持ってきてください」。以前から決まっている避難所という場所がございすから、そのところをいろいろ教えていただいて、もうすぐここを回りましょうということ、保健婦さんに「保健所の車を回してください」と言っただんです。そうしましたら、「出せません」と。そのビルの地下に車がござあつとあるんですけれども、シャッターが開かないんですね、電動ですんで。少し傾いていきますんでシャッターが開かない。シャッターが開いたとしても、上ってくる道と普通の道の間に四、五十センチの段差ができていますんで車が上がらないんです。ですから、使えるのは我々の四輪駆動車二台だけ。そこに一人ずつ保健婦さんを引きずり込みまして、我々は地理がわからないですから、夜の町にぼんと飛び出したんです。

一番初め着いたところは、高台のある小学校、近づいて行きますと、その小学校からも火が上がっているんです。これはこの小学校も火事、まずいなと思っただけなんですけれども、近寄って見ますと、校庭で炊き火をやっているんですね。一月十七日、ものすごく寒かったんですから、皆さん炊き火をやっているんです。ああよかったと思ひまして、車からぼこつと出ますと、これはやばい、非常にガスくさいんですよ、周りが。炊き火でしょう。これはまずいなと思っただけ、小学校の中に入っただけです。古い小学校でした、木の廊下の。そのところに入っただけです。教室の前に立つたんですけれども、夜のもう十一時も来ようとしていたときですから、本当に真っ暗なんです。教室の入り口に入って中を見たんですけど、真っ暗で何も見えない。じいっと眺めておきますと、ぼつぼつぼつと明かりが見えてくる。何だろうというふうに思いますと、被災者の方々がこちらを見ていらっしやるんですね。その目なんです。ようやく私は気づきまして、あちらも気づいてびっくり

していたんで、初めての医療隊だったから。もう「病人とかけがなかつた方は廊下に出てください。並んでください」というふうに言いましたら、教室の中にドーンと一発きつい一言があつたんです。「廊下に出れる方はいいです。教室の中で動けない方がいらっしやる。そういう方々を初めに診てください」。私は、そのときに本当にショックを受けた。海外のいろんな難民キャンプ、被災地へ行ってきたけれども、そういうところに行きますと、もう医者が来ますと、「私も診てくれ、私も診てくれ」という人たちがずうつと押し寄せる。「私も薬をくれ、薬をくれ」という人がずうつと押し寄せる。しかしながら、当日ですよ、当日、神戸の方々というのは、こっちの方の方が重傷だから先に診てやってくれ。本当に譲り合いの精神というか、世界的に驚かれたのが、当日でさえも神戸の方々というのは非常に冷静でおられた。それが世界的な驚きだったんですけれども、私も非常に驚いたとともに、そのときほど日本人に生まれて誇りに思ったことはなかった。

ようやく重傷の方々、動けない方々、教室の中で診まして、廊下に出たいてざつと並んでもらったんですけれども、そのときも皆さん、おげがなされてるんです、当日ですから、後ろにいるの方が重傷ですから先に診てやってくださいというふうな譲り合い、それがあつたんですよ。

その日は、我々たくさんの医薬品を積んでいきました。もう本当に当日ですから、もう骨折で足がぶらぶらになっている方もいれば、背骨の損傷でもう全く下半身が動けない方もいれば、傷もいろんなガラスやらいろんなもので切って、もう二、三十センチがばつと傷口があいている方もいらっしやつた。そういう傷口に近くにあつたタオルを持ってきて、びたつとその傷口をカバーして、止血はしているんですけれども、そのタオルがその傷口にべたつと張りついているわけです。並んでくださつ

た方々、たくさんそういう方がいらつしやった。そういう方々のタオルを、我々が持っていった点滴用の水、きれいな水なんですけれども、それで少しづつ洗い流すんです。タオルを取っていくんです。そうしますと、血がだらだらだら流れてくる。ようやくそのタオルを取りまして、傷口をきれいな水で洗う。その後に、縫えると判断したら縫うんですけれども、麻酔薬というのを本当に我々、ほとんど、ほとんどというか、持っていったんですけれども、人数が多いもんですから一人にたくさん注射をできないんですよ。吸いまして、少しづつ傷に注射をしていくんです。その後、縫うんですけれども、ほとんどきかないんです、麻酔薬が。私もし患者だったら、もういいというふうに言いますけれども、皆さんは本当に我慢強かった。もうこれはお世辞じゃなくて。それだけの麻酔薬でも文句一つ言わずに縫わせていただいた。どんどんどんどん縫いました。私も、本当に当日、一〇〇人近く縫いましたので、どんどん縫っていった。ある中年の女性が、本当にこの方も二、三十センチぐらいの傷がありまして、もう縫ったんですけれども。痛かったらと思うんですけれども、私が縫った後に、「どこからいらつしやいましたか」、そういうふうに聞かれたんです。「私、岡山です」というふうに言いましたら、「こんなに早く遠いところからありがとうございました」、そういうふうに頭を下げられた。私、そのとき、自分の心の中で、本当に思わずその方に対して頭を下げていたんです。本当に「ありがとう」というふうに言うのは私の方ですって。なぜかという、我々AMDAの人間、今ボスニアヘルツゴビナでもルワンダでもソマリアでも、もう戦火が激しい地域で活動している看護婦さんやら一般の方々やら医者やらいます。しかしながら、みんな普通の方々です。マザー・テレサとか、ああいうふうな偉い方じゃないです。本当にみんな普通の方々。自分の身をすべて犠牲にして、

そういう困っている方々のために仕事をする、そうではないです。本当に普通の人間です。本当にみんな、我々何のためにボランティアしているんだろうか、いつも考えている。最終的に出た結論というのは、自分自身のためにしているんじゃないだろうか、そういうふうに思うんです。

例えば、今回の震災において、テレビなんかであのたくさんの方が人、崩壊したビルというのが流された。そのときに、ことはボランティア元年と言われましたけれども、たくさんの方が現場に入ったからボランティア元年というんじゃないというふうに私は思うんです。もう本当に日本のすべての方々、すべての近い方々というのは、自分が何かできるんじゃないかという思いをそのとき抱かれたんだと思うんです。それが、やはりボランティア元年。日本にはボランティアの精神というのは非常に少ないと言われていたんですが、あるんです。それが再確認できたということでボランティア元年だというふうに思っているんですが、我々はああいうものを見たときに、何かしたい、何かしてあげたい。そういう情熱がわき上がってくる。そして、私は医者ですけれども、個人個人にいろんな技術がございまして、主婦だったら御飯を炊く、洗濯をする、いろんな技術がございまして。そういうふうな技術というものを何か役立てることができるんじゃないだろうか、そういうふうな思いがあります。そして、現場に行きまして、自分の情熱、そして本当にわずかながらの技術、そういうものを生かせる場所がある、人がいらつしやる、そのときほど自分自身に本当にわき上がってくる気持ちといいますか、そういうものがあるんですけれども、実際人間にとってそれが非常に喜びなんです。そして、もうボランティア活動をしていくうちに、いろんなボランティアの方々、被災者の方々とお話する。そして、被災者の方々とお話しすることによって、被災者の方々が何が必要か、どうい

援助が必要か、自分が何をしてあげられるか、そういうったものを発見して、自分で計画してやっつく。つらいこともあります。最終的に失敗することもある。楽しいこともある。しかしながら、そういうった活動が終わったときに、自分自身がものすごく成長しているのがわかるんですよ。そのために、我々はボランティアをやっているんじゃないかというふうに思う。

そして最後に、その女性のように「ありがとうございます」という言葉をいただく。ボランティア活動というのは無償の行為だというふうに、お金をいただかない行為だというふうに言われております。ですから、私はその「ありがとうございます」という言葉、これは心の報酬というふうに思っておるんです。その心の報酬というのは、本当に私自身の経験ですけれども、うれしいものです。そして、またこういうふうなボランティア活動をしてやろうじゃないかという、そういうった気持ちに結びつくんです。そして、自分が非常に成長する。ですから、自分の身をすべて犠牲にして我々はボランティア活動をしているんじゃない。自分自身のため、自分の成長のためにやっているんだ。我々の仲間はたくさんいます。もう何十人と海外に出ていますけれども、皆さんやはり自分の成長、それが目的ではないですけれども、一つの動機だというふうに思います。

その災害の現場、私、当日に入りまして、避難所をたくさん回りまして、そして帰ってきました。保健所の中に診療所を設けてまして、たくさんの方々が来られるようにした。そういうった活動をしてきたんですけれども、いろんな患者さんがおられました。十八日、次の日にある避難所に行ったら、初老の御夫婦が小学校の廊下のところで寝ていらっしやるんですよ。両方とも下半身が全く動かないというんです。痛みもないと。私が診ましたところ、タンスか何か落っこってきて、背骨を損傷なされ

たんですね。もう通常でしたら救急車ですぐに運ぶ。その区役所の隣が消防署でしたんで、私は「すぐに消防署に行つて救急車を出してもらってから安心なさい」と言つて請け負つて消防署に行きましたら、「救急車を出せない」と断られた。今、瓦れきの下にたくさんの方が埋まっている。すぐ手術をしなければ助からないか、すぐ治療をしなければ助からないか、そういう方々しか救急車は使えない。病院もいっぱいである。断られた。私は本当に断られて帰る車の中で、その方にどういふふうに御説明申し上げようかと思つて悩んだ。もう本当に頭を下げて、できませんでしたということも言つて、後任の人にすぐに救急車の手配がいたらこの方を病院に送ってくださいというふうに言つたんです。

実際問題、我々医療の世界では原則がございませぬ。ああいう大災害が起こったときに、トリアージというフランス語がございませぬけれども、日本語で言いますと、患者の選別というのがある。これは、我々医者にとっては非常につらい決断でございまして、例えば私一人が医者、ここで地震が起こった。皆さん、みんなけがなされたとしますと、どの人から最初に診るか。もしある方が息はあるんだけれども、今どんなことをしてもその人を助けられない、そういうふうな私が判断しますと、その人を捨てるんです。何もしないんです。その人に私がかかりつ切りになつて十時間やったら、私は一〇〇人、二〇〇人の患者さんを診れる。そのときの家族に、息があるのにこの人は診れません、そういうふうな言うというのは本当につらいことなんですけれども、その判断をしなくちゃいけない。そして、日本の医者というのは、もう海外の現場に出ましてもだめなんです。内科のお医者さんといつても内科のお医者さんじゃないんです。心臓のお医者さんは違うんです。ある一本の血管の専門の

お医者さん、そういう方々が多いんで、飛行機で病人が出ても手が挙げられるかと私の同級生に聞きますと、手を挙げられる人が少ないんです。ですから、海外の現場においても、もう本当に日本の医者というのはあんまり役立たないんですね。皆さんも病院へ行ってみてわかるように、もう何時間も待たされて、数分、もう話を聞いて数分こう聴診なんかされて、すぐにレントゲン撮っていらっしやい、血液検査していらっしやい。回されます。大体、お話を聞いて、体を聴診、打診とかして、八割から九割は診断ができる。昔のお医者さんはみんなそうやっていたんです。しかしながら、機械が非常に発達した、専門分野が発達したおかげで、そういった能力というのは日本人は非常に落ちている。海外の現場なんかでは、それが非常によくわかるんです。

ああいう阪神大震災の現場なんかでも、医者が行きましても、海外のお医者さんの方が役に立つ。ですから、本当にこの方は息があるんだけれども、助けられない。そういうふうに判断するのって、日本のお医者さんには非常に難しいんじゃないかと思う。

こういう話がありました。ある救急救命士の方がいらっしやいます。救急車に乗っているんな救命行為ができる方なんですけども、町へずうっと入ってきまして、ある女性がつぶれた家の前で泣いていらっしやった。「自分の子供が柱の下つぶされてるんです、助けてください」、そういうふうに泣きつかれた。しかしながら、その救急救命士の方、見ますと、柱の下に確かに子供が二人いるんですけど、もう亡くなってるのはわかってる。もうわかるんですって。お母さんに本当につらい思いをして、「私には助けられません」というふうに断ったそうです。その救急救命士の方、その子供をその柱の下から出すのに五、六時間かかったとすると、何人の助かる命というものを運べる。命を助けら

れる。こういったときには順番で残酷な順番がございまして、患者の選別を我々せんといかんです。そういう意味で、医者というのは本当に大きな責任をいただいているんだというふうに思いますけれども。そういうふうな感じで、もう非常にそのときはつらかった。

こういう患者さんいらっしやいました。私、先ほど保健所内に診療所を設けたというふうに言いました。三日目、昼間にほとんど眠ってなかったんですけれども、もうたくさんの患者さんがいらっしやるんで診てたんですね。そうしましたら、私より体の大きな背の高い方が、「右足が痛い」と言っていて私の前に座られる。「どうしたんですか」って、お話を聞いてるうちに、そのでっかい体をわんわんわん振るわせて泣き始めるんですよ。「どうしたんですか、どうしたんですか」と聞いても何もおっしやらない。ようやく話してくださいました。ある家の中で、奥さんと川の字になって寝てたんですって、隣で。そうしましたら、地震が来た。たんすが倒れて奥さん下敷き、即死なんですって。そのたんすのはじが自分の布団に当たって、打撲を負ったんですけども、自分は何とかそのつぶれた家んとこから逃げ出して、避難所に入ったと。最初の二日間は痛くないんです、これが。緊張していると人間というのは痛みみたいなものを感じにくくなるんです。ですから、避難所で避難してたんですけども、そこでクリニック、診療所が開かれるというのを聞いて、ようやく来てくださった。私みたいなやぶ医者の前でも座ってくださいって、太ももが痛いんだ、そういうふうにおっしやるんですね。そうしますと、ずきずきずきずきずき安心して太ももが痛くなってくるんです。そのずきずきずきずき大きくなってきた痛みが、隣で亡くなった奥さんのことを思い出させる。それで泣き始めた。

私、精神科医じゃございませんので、本当に足の方はもう治療しましたけれども、心の方を治療し

て差し上げることができなかった。三十分ぐらいその方だけに付き添ってお話を聞いてあげる。はあ、うんうんということでお話を聞いてあげるといふことしかできなかったんですけれども、その方、ようやく納得されて避難所の方に帰っていかれた。そういう方もいらつしやった。

ある避難所で私呼ばれたんです、二日目の夜に。「助けてください」と、ある三十歳の女性が、体育館の中で何百人も入っているとこですから、そこでもう泣きわめいてんですと。みんなの迷惑ですと。注射でも薬でもいいから眠らしてくださいということで、私行きました。なるほどもう泣きわめいて、笑ったり泣きわめいたりしてるんですね。道に連れ出しても行き交う通行人に抱きついたりキスをしたりいろいろすごいんですって。「どうしたんですか」って聞いてら、子供さん亡くなったらしいんですね、目の前で家がつぶれて。私、薬とか注射で眠らせるのは簡単だけでも、それじゃあまた同じだよつとつとで、その家族だけ校長室の方に別個に移しまして、そこで薬とか注射を与えて、ようやく小康を得たんですけれども、実際問題、それ以降その女性がどういふふうな心の傷っているのをいやされてるかつというのは、非常に心配しておるんですけれども。

非常にうれしいこともございました。十八日、二日目の夜あたりに、ある小学校の保健室に私入ったんですよ。そうしましたら、非常に太ったおばさんがベッドの上に寝ていらつしやるんですね。聞いたら、神戸西市民病院に入院してたんだけれども、全員がほかの病院に移れなかったんだと。移れなかった方々は、そういうふうな小学校の保健室の中で寝かされてるんです。もう心臓ぜんそくといまして、心不全がひどくなるとぜんそくみたいな症状になるんですけれども、寒くて風邪をひかれて、それだけほげほげほしてたんです。緊急の薬剤なら我々持ってきてんですけれども、内科的

な慢性的なものというのは余り持つてない。ですから、生活上の指導とか、そういうたものいろいろしまして、今救急車はだめだから、我々の後任にもうすぐこの人は救急車の手配がいたら病院に送ってくれということ、私その場を離れた。名前も何も言っていないです。一カ月後ぐらいに、自分の病院で診療しますと、神戸の長田区から「鈴木です」といふふうな、男の人の電話があったんですね。「ありがとうございます。母元気になりました」といふふうに言われた。私何が何だかわかんなかった、その名前に。全然名前を聞いてなかったから。それで、お話を聞いていくにしたがって、その方だというのがわかったんですよ。息子さんが本当に名前も言わなかった私の、名刺なんか渡してないんですよ。校長先生に一枚だけ渡した。それを探してくれて、私に電話をかけてきてくださったんですね。もう本当にこういふうれしいこともございますし、挫折することもございます。苦しいこともあるけれども、やはりやった後というのは、自分自身がすつと成長しているのがわかる。そういった意味で、私自分自身のためにこういった活動というのを続けているというふうに、私は認識しております。

こういった活動を我々やってるわけなんですけれども、話だけではおもしろくないんで、ちょっと、時間はまだあるんですね。じゃあ、スライドの方を、阪神大震災も含めましてルワンダとか、ソマリアとか、ネパールとか、バングラデシュとか、そういったところの我々の活動というのを見ていただきたいと思えます。

先ほど申しましたように、私アフリカにかかわるようになってから十七年たつんですけれども、これが今三十九なんですけど、これは私二十九のときの写真でして、隣にいるのは岸ユキさんという女

優さんです、この方の通訳を私一カ月ついてアフリカ語やってたんですけれども。はい。

これが当日の長田の火事の現場です。当日の写真です。本当に火事がひどくて、自分の家というのはやはり金をかけて、こんな地震にはびくともしないぞっというふうなときにも、隣が火事だ。火をかぶるといふことがある。じっと見てるしかない。そういう方々もたくさんおられました。はい、次お願いいたします。

これなんか、崩れた高速道路、この先にあるんですけれども、やっぱり崩れてなくてももう同じところのコンクリートがはげまして、鉄骨が見えて、それが少し曲がってる。次の余震でもくれば絶対につぶれるというふうには思ってたんですね。これはもう神戸西市民病院、四階部分が全部崩れた病院ですね。はい、次お願いします。

これがその中に入って撮った写真なんですけれども、崩れたとこってのは、こういうふうになってんですね。はい。

これなんかは、一階部分駐車場だったんですけれども、この建物自体はかなり丈夫なんじゃないかと思えますけれども、つぶれて落ちてるところですね。はい。

これなんか一階部分駐車場だったんで、この下にたくさん車がつぶれてます。ですから、皆さんの中でお金がたくさんあってビルを持ちたいという方々は、一階部分はあまり駐車場にしない方がいいんじゃないかというふうな思えますけれども。次、お願いします。

これはよく出た写真ですね、三宮の。はい、次お願いします。

これももう火事の、黒い煙がたくさん上がってまして、道が陥没しまして水がたまったとこですね。

はい。

もうこれが長田の焼けた跡です。もう戦後の焼け野原という、私知りませんけれども、こういうふうな状態じゃなかったのかなというふうに思います。はい、次お願いします。

これこの火事の現場で亡くなった方々にミカンとか花とかジュースとかを献じてるとこなんですけれども。はい。

我々が避難所回りをしまして、何で寝たきりの御老人とか、御老人少ないんだろうというふうな思ってたんですよ。御老人もつと多くてもいいはずだというふうに思ったんですけれども、そしたらいろいろ家を訪ねていくにしたがって、お家にいらっしやる。御老人はトイレに近いとこにいらっしやるんで、家がつぶれてそのままつぶされる方が非常に多うございます。そして、この家のように、これ一階部分無事ですけど、二階部分は完全にこう斜めになってますでしょ。こういうふうな半壊の家でも、自分の家を離れたがらないんですね、やっぱり御老人。避難所に行きたくないんです。そういう方々がたくさんいるというのを我々知りましてもう避難所回りだけではだめだと。たくさんポランティアを町にどんどんどんどん出して、地図をつくりました。ここにこういう御老人がいる。そういうところを我々は往診に行った。もうそういうところは老人の方が多いんです。こういうところを行かなくちゃいけないんです。そういうときには、もうこういうところへよじ登りまして、行くという事なんですけれども、もう余震でもくれば完全にアウトなんですけれども、注意して行きましたけれども。はい。

こういう、これうちの副代表なんですけど、こういうふうなでぶちんが行きますと、本当にあそこを

登るのが大変なんですけども。はい。

これが避難所にいた女の子なんです。この女の子もこれいつの写真ですか。少したった後の写真なんですけども。二十七日ですか。この女の子も目の前でお母さん亡くされたらしいんですよ。今回の地震において両親を亡くされた人が八十八人、そして片親を目の前で亡くした方が四百数十人いるというふうに言われてますけれども、我々非常につらい思い出があるんです。ちょうど四年前なんですけれども、カンボジア難民の女の子がうちに来たんです。ちょうど先ほど言いました一九七九年、一九八〇年あたり、日本政府も何人かのカンボジア難民を日本人として受け入れたんです。そして、その女の子は三つか四つのころに日本に来て、ずうっと二十歳の今まで、日本で暮らしてた。もうほとんど日本人です。そのカンボジアが平和になった。自分は看護婦になって自分の国のカンボジアで働いて国のために働きたい。そのためには看護学校へ入らなくちゃいけない。勉強しなくちゃならないから、一年間うちに働かしてくれということで横浜から来たんです。いいよってことで、その日は応接間に泊まっていた。そうしたら、夜中にわんわん泣いて、賄いのおばさんに一緒に寝てくれて泣きつくんです。「どうしたいか」って聞いたら、「カンボジアにいた三つか四つのころに自分の目の前でおばさんも、大きな刀でさあっと首を切られて殺されたのを目の前で見た。十七年たった今でも夜一人で寝ていると、その光景が自分の中によみがえってきて眠れなくなる」、「そういうふう言うんです。実際問題、今回の震災でもこういう子供たちがもう合計五〇〇人ぐらいいた。そういうふうな心の傷、我々トラウマって言いますけれども、もう十年、二十年、三十年、四十年、一生続くんじゃないか。それをいかに今を生きている我々というのはいやしてあげられるか。

そして、皆様宗教者の方々がいやして差し上げられるかというのが、我々に課された義務だというふうに思うんですけども。はい。

これが十八日というふうに書いてありますけども、当日の夜です。私がある小学校の理科室で患者さんを診ているところなんですけれども、やはり当日ですんで、外傷とか骨折とかが非常に多かったですね。はい。

これが保健所で診療所を開いているとこんなですけれども、これ普通ならシャークス線といまして、X線、レントゲンを見る機械なんですけども、このときにはレントゲンなんか撮れませんから、この機械というのは何のためにあるかというのと、自家発電してこれをともしまして明かりを得てたんですね、患者さんを診るのに。はい。

これ小学校内の中に保健室に設けられた我々の診療所です。はい。私当日に巡回診療の順番をざっとシステムをつくりまして、診療所をつくり上げまして、そしてすぐにくさんの医師が我々のもとに集まってくれた。そして、私さっき言ったように、現場に入っているいろんな方々の意見を聞いて必要なもの、それを本部、岡山に伝えます。岡山から次の日、十八日と十九日にセスナが神戸に飛びまして、足りない医薬品をどんどん届けてくださった。これだけの素早さというものは、我々といえますか、岡山県が持っているんです。我々いろいろ岡山県とか市とか町に呼びかけまして、そういう体制をつくらうという、そういうふうな働きかけをしております。十八日、次の日とその次、セスナが飛びまして我々に医薬品が届けられた。それほどの機動性を発揮した県というのは余りないんじゃないかというふうに自負しておりますけれども、これはもう日本国

じゅうから集まられた医者とか看護婦とか一般の方々、そういう方々がここにいらっしやる。A、B、Cという経路を決めまして、次の日の巡回診療、そして診療、いろんな食糧を配ったり水を配ったりするボランティア活動をだれがやるかというのを毎日六時にこういうふう決めておりました。

我々にいるんなところから電話があったんです、うちの本部に。ボランティアに行かしてくれ。そういう方々というのは、我々ができるだけ現場とか我々の本部、そこで手伝ってもらえるようにしたんです。なぜかと申しますと、神戸市とかああいうとこにみんなかけたんですけれども、かかんないんです。かかってもボランティア担当の方が三人しかいない。ですから、もう全部の事務量、人なんか受け入れられるわけじゃないです。もうリストには載っけてここぞというふうに言われ、ずうっと待たされてる人が多いんですね。そんなときに我々電話かかってきましたら、「あつ、じゃあお願いします」ということで、もう便所掃除であろうが荷物運びであろうがいろんなことをやっていただいた。といいますのは、我々は、我々NGOの仕事というのは救援活動することもあるんですけども、皆さんが何かやりたいというふうな気持ちというのを具体化する、場所を設定する、そういったこともあるんじゃないかというふうな思ってる。ですから、できるだけたくさんの方を参加していただくというふうな方針ですつとやりました。ですから、本当たくさんの方々が集まってこられて、大きな救援活動でした。

私秋田にいたころ、ようやく大学病院へいまして、秋田弁、本当にわかんないんですけども、何とかマスターしまして、標準語と秋田弁で話した場合というのは、やはり患者さんの、患者さんといえますか、私医者ですから患者さんですね。感じられるそういういった安心感とかそういうものが、本当に迫力とか違うと思うんです。ですから、もうできる限りそういう方言とか、そして現地の習慣とか文化、そして宗教、そういったものを取り入れることによって我々はやっていきたいと思えますし、先ほどの御意見、本当にもうすばらしいというふうに思いますし、我々の目指す方向と一緒です。ですから、何とかこういうふうな緊急の場合には、兵庫の方言というのはどうしてもやっぱりちょっと難しいんじゃないかなと思うんですけれども、その辺は御容赦いただきたいと思うんですけれども、申しわけございません。全国からこれどんどんどんどん集まっていっしやいました。はい、次お願いします。

これは岡山大学の学生なんですけれども、彼らも問診とか血圧とかはかっただきました。はい。

これはいいです。次、お願いします。

これもいいです。次、お願いします。

御存じかと思えますけども、悪徳業者もおりまして、当日焼き芋一本三、〇〇〇円で売ったとか、そういうふうな悪徳業者がおりましたけども、やっぱりこういうふうな移動喫茶店ですけども、コーヒ一杯一五〇円とか、こういうふうな店もどんどんどんどん時間たつにしたがって出てくるようになった。しかしながら、我々の仲間の精神科医というものは、三度ほど神戸に行っただんです。一番初めは直後とあと一カ月ぐらいたってからと三カ月ぐらいたってから、そのときの避難所にいらっしやる方々の心というのは、全然違うんですって、三回とも。第一回目というのは、すぐ仲間意識が強い。みんな被災を受けた仲間だ。共同体意識が強かった。しかしながら、一カ月後というのは、だんだんだんだん心が離れてきて、孤独感というものが募ってくる。といいますのは、自分は会社も全部

つぶれて行くところもない。家もつぶれた。じっとしているよりない。そういう方々がいらっしやるんですけども、同じ避難所の中に自分の会社はあるんだ。避難所から通われる方が出てくる。そうすると、非常にやっぱり自分だけが取り残された、そういう感じがあると。三カ月後に行きますと、今度は仮設住宅の抽選というものがございまして、避難所から出ていかれる方々がある。しかしながら、自分は当たらない。御老人なんかはそういう抽選にも並べないということで、もう自分だけが取り残されるといふ状態が非常に強くなってきて、精神科医が診たら少し病気になるんじゃないかと、そういうふうな状態もあつたということです。はい、次お願いします。

これはいいです。次、お願いします。

先ほど申しましたように、加茂川町という六、〇〇〇人の岡山の北の町がございまして、ここが町民ぐるみで加茂川インターナショナル・オーガナイゼーション、KIOという組織があるんですね。我々はいろんな宗教団体とか政治団体とかそんないろんな団体と一緒にやるとともに、地方自治体とも一緒にプロジェクトをやるというふうな計画を持つてんです。二年前にソマリアにこの加茂川町から二人の役人さんが私と一緒にソマリアに飛んでくれた。それから、加茂川町に一〇〇人以上の、中学校二年生から七十何歳の人たちが、国際貢献の組織をつくって、ずうっと国連、ボスニア、ヘルツゴビナとか中国に植林をしたり、そういうふうな活動をずっとやってた。この震災のときも次の日に我々の本部に来てくださって保健婦さんがいろいろ活動やってくださった。そして、町の役人さんが個人の資格で現地に入られまして御老人のいろいろ声を聞いた。やはりおふるは大切なんじゃないか。おふるは必要なんじゃないかということで、町に帰られて仲間を集めて、もう全部準備をし

て、そして行く寸前になって町長に、「じゃ、こういうことですから行ってきます」ということで行ったらいいんです。今までの自治体とか役人というのは、上の方が、「おまえこれをやれ」ということでやるというのは非常に方針の手段としてよかったですけれども、この町というのは、もう現場に行つて、人々の話を聞いて自分でプログラムをつくり上げて、仲間を集めてやる。最後に町長に報告する。そういった活動をする。もう下まで本当に活性化されてるわけなんです。ここにボランティアの真髄というのを見ると思ふんです。

例えば、老人ホームなんかに行きまして、ボスボラというのがいます。ボスのボランティアというのがいまして、ボスのボランティアが、「あんたこれやって、あんたこれやって」と言つて、それをやつてボランティアになる。それはボランティアじゃないというふうに思う。ボランティアというのは、自発的な自由意思によつてやる自由行動だというふうに、援助活動だというふうに思ひますけれども。実際問題、自分で老人ホームにしる、こういうふうな現場にしる、自分で見て、そして例えば御老人の声を聞いて、この方は本当に物が無いんだろうか、もう寂しさがあるんじゃないか、自分でそういうふうな必要なものを発見して、それを援助するためには何をすればいいか。それを計画して仲間を集めてやる。だからこそボランティア活動というのはおもしろい。おもしろいというふうに、私はあえていいですけども、おもしろいんだというふうに思うんですね。しかしながら、ボランティア活動というのは、一つ大きな原則がございまして、これは一つ自立ということなんです。我々海外でいろいろやっております。私は医者なんですけども、現地にいて医者の仕事はやりたくないんです。最終的に私は日本に帰っちゃら身です。そうしましたら、難民の中から医者と看護婦を探し出

してくるか、それとも才能のある方を引き出してきて、その方にどんどんやらせて、その方ができるようになったとこ、つまり自分たちで自分たちの健康を守るようになったところで私たちはさっともう引いていく。それが一番いい形だと思ってる。

例えば、老人ホームにして、脳梗塞になって半分上肢、下肢がきかない方、そういう方が隣のポータブルトイレに一生懸命五分、十分かかってトイレに着くと。そういうときに、その方をトイレにひよといと移動させるというのを私はボランティアじゃないというふうに思うんです。その方をずうつとそれを見ていらっしやればいい。倒れそうになったら支えてあげればいい。そして、その方は何分かつても自分でそのトイレに座られる。残った左の機能によって自立なさる。それをボランティアというのはいかに手助けすることができるか。自立に至る道をいかに手助けすることができるか。やり過ぎてはいけけない。自立というものを、常に相手の自立というものを考えなければいけない。自己満足でもいいけれども、やはり自立というものを考えなくちゃいけない。そういうふうに思います。はい、次お願いします。

これは前にこういったボランティアの車が食糧とか医薬品、人間を積んで十台ぐらい神戸に向かっておりました。はい。

先ほど言いましたように、ほかのボランティアの団体、電話使ってたところは、非常に電話の通信が悪くて苦労してたところが多いんですけど、我々も電話なんて最初から当てにせずに、岡山県のアマチュア無線連盟、関係はなかったんですけど、すぐに飛び込んで、本部の方とそして長田の方に無線で結んでくれと、すぐにやってもらいました。無線で定期連絡でずうつと連絡してましたんで、通信に

は全く困りませんでした。はい。

これなんですけども、現地が一番困ったことというのは、区役所の中に我々泊まってたんですけども、水なんです。水が全然出ないんですよ。こんなときにおしっこはじゃあ流せばいいんですけども、大きい方の場合にはここにある新聞紙をここに引きまして、そこにするんです。その新聞紙を畳みまして、この前にあるビニール袋に入れてそれで終わりなんです。だから、たいへんくさいんですよ。女性というのは、本当にたくさん看護婦さんとか、普通の女性来られたんですけども、がまん強い方多いですね。十日とか二週間とかいらっしやって、小の方はするんですけども、大の方は一回もせずという、そういう豪傑もいらっしやったんですけど、もともと便秘の方が多いというふうに思うんですけども。

先ほど言いましたように、自給自足、自己完結性と言いました。こういうふうなごみとかそういうものも神戸に置いたら神戸の負担になる。全然処分できないということで、先ほどのトラック、帰りの便にすべてこういうふうなごみとかうんこかを載せまして、岡山に帰ってきてすべて処分する。そこまでやらなけりやあだめということ。はい。

これが岡山に持ってきた、うちの病院の前なんですけれども、全部のごみですね。はい。

これは岡山市の市長さんなんですけれども、この人も非常に素早く、二日後には我々にもう激励状をいただいて壁に張ってたんですけれども、我々テレビカメラが来るときには、必ず体でこれを隠すんです。なぜかという、この方の選挙が目前に迫っております、映すわけにいかかったんですが、これはもう選挙終わった後ですね。はい。

この女の子、九州から来た二十四歳の幼稚園の先生なんです。ちょうど震災の二週間前にお父さん亡くされてお母さんと二人だけになっちゃった。それで、テレビ見てて、この女の子は何かできないだろうか、何かしたいということ、いろんなとこ電話かけたんだけど、断られる。そして、うちにかけて、「来てください」というふうに言われて、行くかと思ったらお母さんがとめたんですって。二人になってそんな危険なところに行かないでくれ。でも、この女の子頑固ですから、ほんと出てきて我々のとこに来た。幼稚園の先生ですから、「現場にまず入らしてください」、「じゃ、入りなさい」と入って、子供たちの世話をどんどんどんどんするんです。そのうちに子供たちというのは、もうほとんど二週間、三週間たつても、心の余裕がない。心の楽しみがないということで、二月十四日にバレンタインデーに、この子たちにチョコレートをやって、そして紙芝居やってエレクトーンをやって、そしてぬいぐるみを持ってきて楽しんであげようじゃないか。彼女一人で思いました。自分で計画こつこつ立てて、仲間をたくさん集めて、そしてやったんです。本当にこれがボランティアなんじゃないかというふうに思うんです。人の指示でやるんじゃない。自分が飛び込んで、その人たちの話を聞いて何が必要かというものを感じ取って自分で計画してやる。そして、失敗しようが苦しいことがあるかもしれないが、最終的にはやはり自分が成長してる。それでやっぱりボランティアなんじゃないか。ボランティアというのは、やっぱり本来楽しいものじゃないかというふうに思う。

私の代表の普波茂がよく言うんですけれども、「AMD Aというのは不幸な人はやっちゃいけないよ、要らないよ」というふうに言うんです。「まず自分を幸福にしなさいな。何で不幸な人が人の幸せに貢献できますか」、そういうふうに言います。これが一つの我々の原則にもなってます。はい。これ先ほどのバレンタインデーのぬいぐるみとかああいうのですね。子供ら本当喜んでました。はい。

これ先ほど言いましたように、アフリカ、ここに、私のいた国がこの辺にあつてケニアという国なんです。二年間、二十一のときにいたんですけれども、それから私二十回ぐらいアフリカの方へ行つてまして、アフリカは私専門なんですけれども、こちら辺に赤道が通っております。そして、ルアンダという国がある。この国というのは、四国より少し大きいけれど、そこに八〇〇万人の方々が住んでますね。去年の五月に大統領の乗った飛行機が撃ち落とされてここで内戦が始まったんです。二つの大きな部族の中で。そして、すぐに八〇〇万人の人口のうち五〇万人から一〇〇万人、つまり十人に一人ぐらい、ぼんぼんぼんぼん殺された。ここキリスト教、カトリックの国ですんで、教会に女の子供が逃げ込む。そこに兵士が来て、手榴弾を三発ぐらい投げ込んで、皆殺しにする。その死体も何カ月もそのままになってた。そういう国です。そして、パンガつていう大きな庭刈り用の刀がアフリカにはあるんです。それで首をばさばさ切つて、それを川に捨てる。こちら辺にビクトリア湖というアフリカの一番大きな湖がございますんですけれども、そこに川を伝って流れ込むんですよ。水死体というのは、ぼおっと三倍ぐらいに膨れ上がります。湖岸から見ると、そういうふうな水死体ももう見渡す限り、それだけすごい残殺が行われた。

そうなりますと、男どもがそういう戦争を始めまして一番困るのが、女性とか子供なんです。あつちの国々というのは、昔の日本と同じように七人、八人、九人子供がいるお母さん方が多い。そう

いう人たちはどんどん海外に逃げ出すんです。八〇〇万人の人口のうち二〇〇万人、四人に一人がこういう隣のタンザニアとかウガンダとかザイル、そういったところに逃げ出したんですね。何十キロも何百キロも離れた、そういうところに歩いて頭に小さな荷物に載っけて子供の手を引いて。その途中でもう病気やら栄養不足でお母さんが死んで全部孤児になる。子供がどんどんどんと減っていく。そういうふうにとんどんと逃げ出して、二〇〇万人の難民の一番多かったのがゴマというところなんです。覚え方簡単なんですけども、ルアンダからこの国境沿いなんです、開けゴマというふうに覚えていただければよろしいんで、ここに十月に自衛隊が入ったんで、皆さん御存じのことだと思いますけども。このゴマで七月から我々は診療所を開きまして、難民のための医療をしてるんです。私も七月の終わりに現地に入りまして見たんですけども、何十キロも何百キロも子供の手を引いて逃れて来た難民が、ここで一日三、〇〇〇人ばたばたばた私が行ったところ死んでたんです。なぜかという、コレラがはやってたんです。コレラというのは、日本では適正な治療さえすれば死ぬような病気じゃないんですけども、ようやく逃げてきてこのゴマへ一〇〇万人もいるところで、一日三、〇〇〇人どんどんと死んでいく、そういうふうな状態、そこに我々診療所を建てて、何とかその数を減らすべく活動してたんですけども。はい、次お願いします。

これがゴマ空港といって、当時アメリカ軍がここを守ってましたんで、アメリカ軍の軍用ヘリがここにあるんですけども、ナイロビというところから我々この空港、ゴマ空港にセスナ機で行くんです。セスナでずうっと来まして、ゴマ空港に近づきますと、滑走路が一本見える。滑走路の上にはゴマなんで、ゴマがざあっとまいてあるんですよ。だんだんだんだん低くなるに従ってそのゴマが動く

んです。もうちょっと低くなると、そのゴマが難民の子供だというのがわかるんですね。ずうっと下がってきますと、みんなばあっと逃げまして、そこに飛行機が滑り込むと、そういう空港なんです。実際問題、子供たちはこういうところで娯楽が少ないんですから、いかに飛行機が近づくまでがまんしてられるかという度胸試しといえますか、そういうものも行われてたということなんですけども。こういう空港がございます。私いろんな世界へ行ってますんで、いろんな空港がございます。

ソマリアという国、皆さん御存じですよ。内戦が起こりまして、今でも政府がないんです。統治する機関が一個もないんです、群雄割拠で。我々その第二の都市のハイゲースというところに診療所を開いてたんですけども、そこにもやはりセスナで飛ぶんです。ジブチという国からセスナで飛ぶんですけども、ずうっと行きまして、ハルゲーサイインターナショナルエアポート、国際というところに飛ぶんですけども、下がってきて滑走路が見当たらない。あつ、滑走路があった。砂利道なんです。そこにずうっとおりまして、管制塔のところへ行くんですけども、管制塔ももうすべて空爆でやられてまして、一階部分しか残ってないんですね。そうしますと、係員が来てパスポートを見せると、一人二十ドルだつてんで、それは集めて回る。そして、空港のビルの中に入っていくんですよ。ビザなんていうのはないんです、支配する政府がないんですから。それで係員がその二十ドルとパスポートを持ってきまして、パスポートともう本当にノートの切れ端、手でちぎったやつに二十ドル受け取ったというのを書いて我々にくれて入国を認めると言って、我々が町の中に車が入っていく。しかしながら、車でああよく入ったと思つて、何かおかしいなというふうに思った。この国というのは、政府がないんだから今二十ドルをだれに払ったんだらう。後で聞いてみますと、その空

港を占拠していた武装勢力に払ったらしいんですけれどもね。そういった空港もございます。この空港はアメリカ軍がそのとき守ってました。はい。

これが難民キャンプの中なんです。ゴマというのは、火山が一つあります。火山がぼおんと噴火しまして、ざあっと溶岩が流れた土地ですんで、非常に地面がかたい。ですから、井戸が掘れない、便所が掘れない。そういった土地なんです。これが、この一本の道がそんな中をざあっと貫いてんですけど、右側に難民キャンプがずうっとあるんです。左側というのは、荒野なんです。何で左側に難民キャンプをつくらないのかなと思ったら、左側が難民の便所なんです。この道を渡りましてみんな空き缶の中の汚い水を持ちましてこっちに行つてうんこをするんです。私車からおりましたら、こちらの荒野から本当にそよ風がすうっと吹いてきたんですけれども、これがすばらしいにおいなんです。もうふん尿のおいというだけじゃないんです。何かふん尿のにおいにこうブレンドされて、もう異様なにおいなんです。後でわかつたんですけれども、そのころ先ほど言いましたようにコレラで一日三、〇〇〇人も死んでた。死体がそこに散らばってるわけです。そういう死体が一日三、〇〇〇体なんか処理し切れませんから、それがだんだん腐っていくわけです。その死臭とふん尿のにおい。それがそよ風に乗って私の鼻腔をくすぐるという、もうずうっとマスクをして仕事をしましたけれども、朝の六時にそういう死体が集められまして、この道沿いにずらあっと並べられるんです。それをトラックにぼんぼんぼんぼん上げて、先ほどの空港横のかたい土に掘った大きな穴にぼんぼんぼんぼん投げ込む作業をする。もう本当にこれほどのもう地獄はないというふうに思いましたけれども、そこに我々診療所をつくって、今でもやっております。はい。

これが難民キャンプですね。こういったわらにビニールをかけまして、ビニールかけないと雨季がありますんで、肺炎がどんどんどんどんふえるんですね。これ国連から支給されたビニールです。はい。こういった一〇〇万人もの難民が家をつくる。そして、料理の煮炊きするのでザイルの周りのもう小さな木は全部刈られてしまって、大きな木はどんどん横から削られていくんですね。ですから、難民というのは環境破壊も同時に起こしていくんです。そして、難民を一番嫌ってんのが何かというと、地元に住んでる人たちなんです。難民というのは、ほとんど一番世界の貧しい国から貧しい国に入っていく。そうしますと、入られた方々も貧しいんです。その農作物みたいなものをたくさんとって自然を破壊して行って、難民キャンプに行けば我々みたいな、ここはNGOがどんどんどんどん入っていく。そうすると、一日千何百キロカロリーと援助をする。そうすると、周りに住んでる方々には全然そういう援助が行き渡らないんです。自分の住環境は全部壊される。援助は全然来ないということ、もう状態としては周りの住民の方が悪い。逆差別ということも起こってくるんですね。だから、本当に活動することは難しいところもございます。はい。

これオクソンというイギリスの大きなNGOが水を配ってるんですね。きれいな水。これきれいな水がなかったから、コレラがざあっとはやつたんです。皆さんも御存じのように、手で御飯を食べます。そして、手でおしりを洗います。右手で物を食べて左でおしりを洗う。便所に行きますと、コップに入れた水、それでうんこしますと、その水と左手でおしりを洗って、残った水で左手をちょこちょこ洗ってそれで終わりということになりますけども。一人コレラにかかりますと、右手と左手というのは絶対合わせますから、ずうっとコレラというのは広がってきてしまうんですね。そうす

ると、もうたくさんの方々、一〇〇万人いますから、もう一日二、〇〇〇人、三、〇〇〇人、どんどん死んでいくという状態になってくる。はい。

これはいつの世でもずる賢い頭のいい人がいるようで、これなんというのは、国連から支給されたこういう穀物やら物資を道で売っているような、そういう人たちも出てきた。実際問題、こういう難民キャンプでもすぐに目抜き通りというのができまして、そこにバーとかいろんなものができるというのは、世界各地でございます。やはり人間社会ですんで。はい。

これが着いたばかりの難民ですね。こういう路端に寝てます。はい。次、お願いします。

これ先ほど言いましたように、死体です。コレラの死体です。ずらあっとこの道沿いに並べられてトラックで、そしてこれが子供の死体なんですけれども、こういった子供の死体が非常に多いですね。はい、次お願いします。

これも死体ですね。はい。

これトラックに載せられて、そして消毒して持ってかれるんですけれども、そのときにこういうことがございました。先ほど言ったように、空港の横の大きな穴、そこにぼんぼんぼんぼん死体を投げ込むんですね。一々医者が瞳孔を見たり心臓の音を聞いたりして死を判定するわけじゃない。どんどんどんどん投げ込むと。あるフランスの兵隊さんが周りを警備してて、死体の山の中、穴の中で、一体の動いてる物を見つけたんですって。フランスの兵隊さん、死体踏み締めながら、穴の底に行きましてそれをめくってみると、四つか五つの男の子だった。フランスの兵隊さん、それを抱えてもう外に出てきれいにしてやって病気治してやって栄養をつけてやって、ようやく元気になったんですけれど

も、フランスの兵隊さん、任期を終わって母国に帰らなくちゃいけないということになった。その子供を自分の養子にして今フランスで幸せに暮らしているということですけども、このように人間の死に至っても混乱してるわけなんです。しかしながら、人間らしい心というものは生きてます。といてますのは、我々が診療所で雇ってたルアンダ人の看護婦さん、昼飯の弁当をあげるんですけども、自己や食わんです。集まってきた子供たちに少しずつ分け与えてやってるんです、毎日。私もあめを持っておりまして、それをやせた子供に二個やりますと、その子が二つ食うんじゃなくて、もっと小さいやせた子に一個あげるんです。そういうふうな人間らしい心というのは、こういうところでも本当生きてます。はい。

これ我々の診療所なんですけれども、日本の旗を立ててます。やっぱり一番現場に行きまして残念に思うのは、日本人の顔がないということ。日本人が何かやっているとあかしがらないこと。一九九一年ですか。湾岸戦争というのがございましたね。フセインがクウェートを攻めましたけども、最終的にはアメリカ軍が入ってきて、クウェートを救ったんですけども。クウェートはその救われた後にニューヨークタイムズでしたか、アメリカの一面広告でこれこれの国々たくさん書いてありがとう、我々は助かりましたと一面広告打ったんですけども、そんなときに日本の名前がない。あの戦争というのは、我々どれぐらい出したかといったら一三〇億ドル、一兆三、〇〇〇億円出した。国民、赤ちゃんも含めて一人一万円以上出したんです。しかしながら、クウェートというのは日本が何かやったというのには知らないのか、あえて書かなかったのか、国連というのもう額が少ないとか遅過ぎるとか、そういうことを言う。あの戦争というのは、ともかくアメリカがやったんですけども、日本

の金でやったようなもんですから、実際問題金を出すのはたやすい。しかしながら、やはり現場においていろんな国々の人たちが一緒に汗を流して。そういうことがやはりやったことになる。そして、お金を出すにしろ、自分はこれだけお金を出したんだぞということを示さないとお金を出したことになる。アメリカでもイギリスでもフランスでも、みんなやったことに対しては宣伝しています。日本には隠匿というのがございまして、何か善行をしたとしても隠れてやるのがいいことだと、そういうふうに使われるけれども、それはやっぱり国際社会では通用しない。自分がやったこと、出した金というのは、これだけ出したんだという宣伝しなければ出したことにならない。参加したことにならない。ですから、我々日本の旗を挙げてやってる。そういうふうにしてやりました。はい、次お願いします。

これは我々の看護婦さんですけれども、マザーテレサのところに二年間ぐらいずっといた看護婦さんですね。はい。

我々のとこに来てる患者さんですけれども、はい。

これがインマルサットと書いて、どんなところからもソーラーバッテリーで日本に電話もかけられるし、ファックスも送れる機械です。我々の命綱、世界各地。はい。

これが先ほど言ったように、もう何十万人もの子供たちが孤児になつてゐるわけです。孤児の中には、もう病気とかコレラとかいろいろなことでも乳も吸えないような子供がいます。そういう子供に管を通してやって、胃まで管を通してやって、それからミルクを入れて治療してやる。そういう子供たちです。はい。

そういう子供たちも元気になれば、これはもう全部孤児たちですけれども、もうすごく元気な顔で寝ますし、遊びますし、はい。

これ孤児たちの食事風景なんですけれども、もうここにいますと話ししても話しか聞こえないぐらい、うるさくて。どこでもやはり、世界どこでも変わらないものというのは、健康な子供の笑顔だということふうに思います。それを見たときに、我々は本当に、「ああ、自分たちはやってるんだ」という気になる。はい。

これ、次お願いします。

ソマリアなんですけれども、これソマリアのハルゲーサという町なんですけれども、これ本当に壁がチークの表面のようですけれども、これ全部こんなですね。町の家全部がこういう感じですよ。天井がないんですけれども、全部空爆でやられた感じ。こういうふうなのをここでしか見れないだろうなと思つたんですが、一月十七日神戸に行つて、同じような光景を見た。本当にびっくりした。日本でこんな光景が見られるとは思わなかった。しかしながら、どっちが不幸だろうというふうにご考えたんですけれども、やっぱりこっちの方が不幸じゃないかというふうには私は思つたんです。といいますのは、神戸では当日から譲り合いの精神、そういう善意が見られた。しかしながら、今なおこういう国々では個々の間の憎しみ合い、そういう悪意が満ち満ちている。本当にこちらの方が不幸じゃないかというふうに、私は思います。はい。

これですね。この子はものすごく高熱が出て、ここに焼き印を押されたんです。現地の伝統医療では焼き印を押すと、そこから邪気が出てって熱が下がって治るといふふうなんですけれども、現地汚い

でしょ。ここに細菌でもつくところがないんで、それによってもっと高熱が出て死んでしまう子供がいる。そういった伝統医療をやめなさいというのも我々の仕事なんです。はい。

これはストーリーがあるんですけども、これいいです。はい。
こういうふうなミルクとか豆なんかを子供たちにあげるのも我々の仕事なんです。はい。

先ほど言ったように、これは難民の中から選んだすごく才能のある方で、我々は彼に全部教えて、そしてここから去っていきました。彼が今難民たちの間の健康を診てると思っています。先ほど言ったように、最終的には彼らで彼らの、自分たちの健康と未来を守りなくちゃいけない。ですから、我々のボランティアの間でこういう言葉があります。「魚を与えるよりも魚の釣り方を教えなさい」と。魚を与えればその場で食べてしまえばおしまいだけれども、魚の釣り方を教えれば、ずうっとそれによって自分たちで生活していける。自立の方向を探る。これが我々の本当にもう重要な原則です。はい。これちょっといいです。次、お願いします。

これもいいです。次、お願いします。
これソマリアのおばさんなんですけれども、一番やはり核兵器もそうですけども、世界で一番怖い兵器というのは地雷なんです。地雷なんというのはいくら二〇〇円、三〇〇円で一個買えるんです。それが全世界に一億何千個埋まってるというんですね。一個取り除くのに三〇〇円の地雷が三、〇〇〇万円かかるんです。そして、今一個掘り出してとったら、世界では十個埋められてると、そういうふうなだんだんだんふえてるような、そういうふうな兵器なんです。安いからどんどんどんどん世界じゅうに埋められます。しかし、一番危険なんです。内戦が終わって平和になったとしても、子供

たちが川に遊びに行く。足がぼおんと吹き飛ばされる。お母さんが川に洗濯に行く。そのときもぼおんと吹き飛ばされる。お父さんがようやく平和になって畑を耕そうとする。その畑にもあって、ぼおんと足が飛んでいく。足が飛ばやつが多いんです。戦車をぼおんと飛ばすやつもありますけれども、足を飛ばすやつの方が安いですよ。後、足を飛ばされますともう一人の兵士がその人の面倒を見なくちゃいけない。二人兵士をつぶすことができる。非常に効率のいいもんです。そういう意味で、このおばさんもやはり足を吹き飛ばされたんですけれども、このおばさんに「足吹き飛ばされて本当に不幸だったね」って言ったんですね。「悲しいだろう」というふうに言ったら、「私悲しくない」と言うんです。「すべてアラアの神が私に運命づけてくださったから」というふうにおっしゃった。本当かどうかはわかりませんが、宗教が違えばやはり価値観も違うんだろうなというふうに理解しました。本当に他国における文化的宗教、そういうものを理解して行動するのは本当に大変なことですけども、我々常にそういうふうな努力を重ねてます。はい。

これはいいです。はい。
これも生まれつき足が悪い子なんですけども、我々つくったんですけれども、松葉づえ、こういうところにクッションがないんですね。痛いでしょうけども、じきにたこができて痛くなくなると思いますが。はい。

これ内戦でやけどを負った人ですね。患者さんです。はい。
これ私なんですけれども、ソマリアというのはアメリカとソ連の本当代理戦争みたいなもんだった。どんどんどんどんアメリカ、ソ連から武器が入ってたんですね。もう人口の数よりも武器の数の方が

多い。大体世界の大国というのは、こういう小国に対してどんどん武器を輸出している国です。はい。

先ほど言ったように、この子の手を見てください。白い腕輪をしております。年齢を聞きまして身長をはかって体重をはかる。それによってその年齢からどれぐらい体の発達がおかれているかというのをはかりまして、十%おくらねたら白、二十%おくらねたら黄色、三十%おくらねたら赤というふうにして、それに応じてミルクとかいろんな高カロリーの栄養を彼らに与える。そういうのも我々の活動です。はい。

これ難民の学校なんですけれども、これが黒板なんです。これ。木の板にこういうふう書いて、これコーランなんです。これを長老が子供たちを集めて講義するわけなんです。子供たちは、土に書いてそれを覚えるんですけれども、この長老に、「もう日本にはたくさんノートとか鉛筆があるから持ってきてあげる」と言ったら、「要らない」と言うんです。「なぜ要らないの」と聞いたら、「我々は石板が欲しい」と。「石かなんかで書いて消せるやつが。ノート、鉛筆というのは使い切ったら終わってしまうと。そういうものじゃなくて、ずっと使えるやつが欲しい」と言うんです。本当援助、物を配るとか援助というのは、そういうところが難しいと思う。ずうっとその方々に物とかをあげられるんらいんですが、ずっとあげられるわけじゃないです。最終的には、彼らが自分でそういうものを賄わなければいけない。自立しなければいけない。そこが物をあげるにしろ援助するにしろ絶対に考えなくちゃいけないところです。はい。

これは絶対に言っておきたいんですけども、この女の子はソマリアという国からジブチという隣の

国に逃げてきた女の子なんです。四つ難民キャンプがあるんですけども、全部難民キャンプの診療を我々AMDAの医師がやりました。私一番初めに行って、これがラマダンという絶食の月が一年に二回ございます。その一つのラマダンの悪の日が日本で言う五月五日、子供の日なんです。子供の日に子供はちょっといいものを食べられて、晴れ着を着られる。でも、お母さん、ソマリア、内戦のソマリアから小っちゃな荷物を頭に載せて七、八人の子供を連れて何十キロも何百キロも歩いてきた。そして、ようやく難民キャンプに着いたんです。私、ある朝起きて難民キャンプに行ってびっくりした。子供がみんなこういうふうな晴れ着来てすごく喜んだ顔してんです。どうしたんだろうと思いましたが、そんな余裕がないはずだが。でもお母さん方、頭に載せたその荷物、小っちゃい荷物の中に一番底に子供たちの晴れ着、子供の人数分だけ持ってきてるんです。このときほど自分の子供に対する母親の愛情、もう全世界同じだと、本当に感じてたことはございません。ですから、先ほどの子供の笑顔と母親の子に対する愛情、こういったものは世界共通だというふうには、このとき本当にもう涙が出てきました。はい。

これはいいです。次、お願いします。

ここはいいです。次、お願いします。

これミャンマーなんですけども、ちょっと時間ないですからいいです。次、お願いします。

これは我々ミャンマーのキャンプで子供たち九九%おなかに虫持ってます。病虫、回虫、いろんな虫を持っています。昔皆さんもやっぱ駆虫剤飲まれたと思うんですけども、そういう仕事をしてました。しかしながら、難民に寄生虫は体にいいかというアンケートをしたんです。今まで健康教育し

てまして、寄生虫は体に悪いんだというふうに教えてましたんで、でも五十人のうち二人が体にいいというふうに答えた。ああ、我々の衛生教育もまだまだだということふうに思いましたけれども、違うんですね。おなかの大きくて手足の細い子を皆さん見たことがあると思います、写真なんかで。あれというのはクワシヨウドコロといって蛋白質が非常に少ない子供に見られる。蛋白質とかもう牛乳とかああいものをとれない。そういうった子供に見られるやせ方。もう一つは、腹に虫がいるんですね。昔の日本とは違ってます、虫の量がすごいんです。げろつと吐いたときに、虫のぐにやぐにやした玉が出てくることもある。こういう駆虫剤を飲ませますと、虫がおなかの中で苦しがつて玉になりまして、腸に突つかえまして腸閉塞になって死ぬ子供もいるんですね。ですから、寄生中は体にいいか、悪いかといいますと、いいと答えた人も正解になるんじゃないかというふうに思いました。はい。

これはミャンマーの我々のこの診療所の前なんですけれども、これは何だというふうに思われるでしょうか。これです。これは我々の使っていた救急車なんです。この二人が救急隊員で、このかごの中に病人とかけが人を乗せて我々の診療所に運んで診察すると。非常に難民キャンプ内では有名でして、便利なものです。はい。

これネパールの我々の診療所に来た子供たちですね。はい。

これミャンマー難民の子供ですけども、苦しがつてる子供の顔を見て、そして元気になった子供の顔、笑顔の子供の顔を見て、そういうときが我々が一番幸せを感じる瞬間なんです。こういうふうな子供たちの笑顔というものが、もう本当にすべての子供に戻ってくるまで我々というのは岡山発の、そして日本発の活動、アジア発の活動として我々のAMDAの活動というものを推進していこうとい

うふうに思っております。ちよつとライトをお願いします。

我々の活動の一端を見ていただいたわけなんですけれども、我々も民間の団体でございます。非常に資金的にも苦しいですし、我々というのはいろんな国際的、国内的なこういうボランティア活動をしようになされる団体、そこと組みまして、一緒にやっというふうな姿勢、今後も続けたいというふうに思っています。ですから、何らかの形で皆様方と我々とこういうふうなプロジェクト、小さくても大きくてもいいですから、実現できることを私願っております。

先ほど申しましたように、我々民間の団体で資金が少のうございます。ですから、主催者の方の御好意で皆様の中に我々の「とび出せAMDA」という本が入っているとあります。これは我々が震災においてどういうふうな、表紙が私の写真なんですけれども、AMDAがどういうことをやってるか、それを解説した本でございます。そのほかに我々三冊ぐらい本を出してるとありますけれども、この「ルアンダからの証言」という本がございます。これとし出した本なんですけれども、これ私中心になつて二章ぐらい書いてるんですが、先ほど御紹介申し上げたルアンダのことなんですけれども、銃傷、銃の傷ですね。刀の傷、コレラ、マラリア、そして栄養失調、毎朝六時、道路脇に並べられた死体をとトラックが回収していく。少しでもその数を減らすべく難民キャンプで診療に当たった医師と看護婦による医療、NGO活動記録というふうになっております。これが現場に行きまして、もう本当にいろんなつらいことや楽しいことがある。そういうふうなことを体験した医師、看護婦、そして普通の方々がつづいた手記をまとめたものがございます。写真がたくさん入っておりますんで、非常に読みやすい本になっておると思います。

あと、これ「遙なる夢」という、うちの代表の菅波茂が「国際貢献と地域興し」を書いた本なんです。二年前の本なんで、ちよつと古いんですけども、これ非常に悲しい本だと言われますんで、私何回読んでも涙が出ませんで、私は本当に感性がにぶってんのかと思いましたが、悲しいというのは「遙かなる夢」の「か」がない。ですから、悲しい本だというふうに言われまして、だまされたんですけれども、実際問題AMDAの歴史はどういう理念で動いているか、どういふ方々の御協力で動いているか。二年前に書かれた本ですけども、こういう本がございませう。

そして、これ山陽新聞社から出た本なんですけれども、「阪神大震災と市民ボランティア」という本、これは岡山の団体がいかに阪神大震災で活動したかということなんですけれども、我々の活動がたたくさん載っておりますんで、こういう本がございませう。こういった本をある程度売ることによって我々の資金の一部としております。そういった意味で、皆さんの中に「とび出せAMDA」あるんですけども、もしこういう「ルアンダの証言」とか先ほどのルアンダの詳しいことが知りたいと思われ方はあそこで非常にきれいな女性売っておりますんで、買っていただければというふうに思います。

ちよつときよつ時間が十数分超過してしまいましたけれども、本当に、岡山というのは最初です。ともかく日本全体を巻き込んでいこう、世界全体を巻き込んでいこうという大きな大それた活動の一番初めだというふうに我々は思っております。そのためには、もう日本各国、世界各国にいろんな団体と協力関係を保ちながら、こういった活動を進めていくことが必要だというふうに思います。ですから、皆さんも本当にできるのかというふうな感じがあるとは思いますが、一人か二人でもい

いと思うんですけども、一回、そんなに危険じゃないです。危険な現場もありますけど、危険じゃない現場もある。もう非常にある程度興味と好奇心とちよつと勇氣がある方は、我々の仲間と一緒に現場に出て、彼らと難民とか被災民の方々と一緒に一回お話しください。そうすれば、非常に世界を理解する、そして相手を理解するということの一助になるかと思えます。

今後とも我々AMDA、そして天台仏教青年連盟のそういう将来の協力というものを期待しまして、私のお話とさせていただきますと思います。ありがとうございます。